

二章 望郷のかなたに — 追想録 —

ホームには地区をあけて、大勢の人たちが集まった。人影で隠れているが、案内板には名所案内として末廣農場と、もう一つ何か書かれている。駅の左にある小屋は官舎のふる場。車両はガ202、フォードエンジンを積んだ単端式ガソリンカー。重さ4.5トン、定員30人。製造は汽車会社支店のもの。車両には成田鉄道のマークが記され、「ナリタ」と読める。

(写真：伊藤 勲氏所蔵)



富里十倉郵便局から、両国共同利用施設の裏側が富里駅のあった場所。軽便鉄道の路線の大半は道路として利用され、現在でもその名残が垣間見られる。

白い倉庫のある辺りには、内田家の倉庫に平行した引き込み線があった。

この写真は昭和14年4月、私が20歳で横須賀の海軍に入隊する時に、富里駅で家族や親戚、田圃国区の人たちが見送ってくれたときのものです。
もうこれで最後という思いが強く、車中では何も話すことはありませんでした。

町の風景も大きく変わったんだろうねえ

富里村に、軽便鉄道が走っていた大正3年から昭和14年ころは、どのような様子だったのでしょうか。支線開通当初からの駅であった、富里駅と実の口駅の近くに、当時から住んでいた人たちの証言などから、軽便鉄道の思い出を振り返って見ることにします。



河西 義雄さん

た。ゆっくりと進む列車の揺れと「ガタンガタン」という音は、今でも忘れられない。照明のカンテラの明かりがますます寂しさを誘う、そんな列車でしたね。
私が徴兵から帰って来たころには、もう軽便鉄道が廃止になっていて、そのときは寂しさと同時に、鉄道の必要性を身にしみて感じました。あの当時から、軽便ではなく本線のような鉄道を富里に走らせたいと常に考えていたなあ。
軽便鉄道は、学生や女学生、店をやっている人などの生活の足になっていて、それに、富里駅周辺でもかなりの飲食店があつて繁盛していたよ。鉄道があつたままあつたら、富里南部は北部以上の発展をしてきただろうと思うし、町の風景も、また大きく変わったんだろうねえ。
それも、もう夢の中の話なんだろうけど、もう一度乗ってみたいな、あの軽便列車にさ。

懐かしいねえ「花の列車」も、昔の兩國も

左の風景は、大正末期から昭和10年ころの兩國地区を再現したものです。春には三里塚方面に続く桜並木がとても素晴らしく、また晴れた日に土手に登ると、遠くは富士山も見えたそうです。駅があったためか、飲食店や運送業などもかなり繁盛していたとのこと。春秋に行われた草競馬には、出店がずらりと並ぶほど兩國の街は活気に満ちたと言われています。開通当初は一日4往復だったのが、最盛期には7往復となり、三里塚の観桜期には臨時便も運行されました。別名「花の列車」と呼ばれた軽便列車は、敷設は戦争に起因しますが、むしろその光景は平和そのものでありました。

雨の日にはレールに砂をまいて

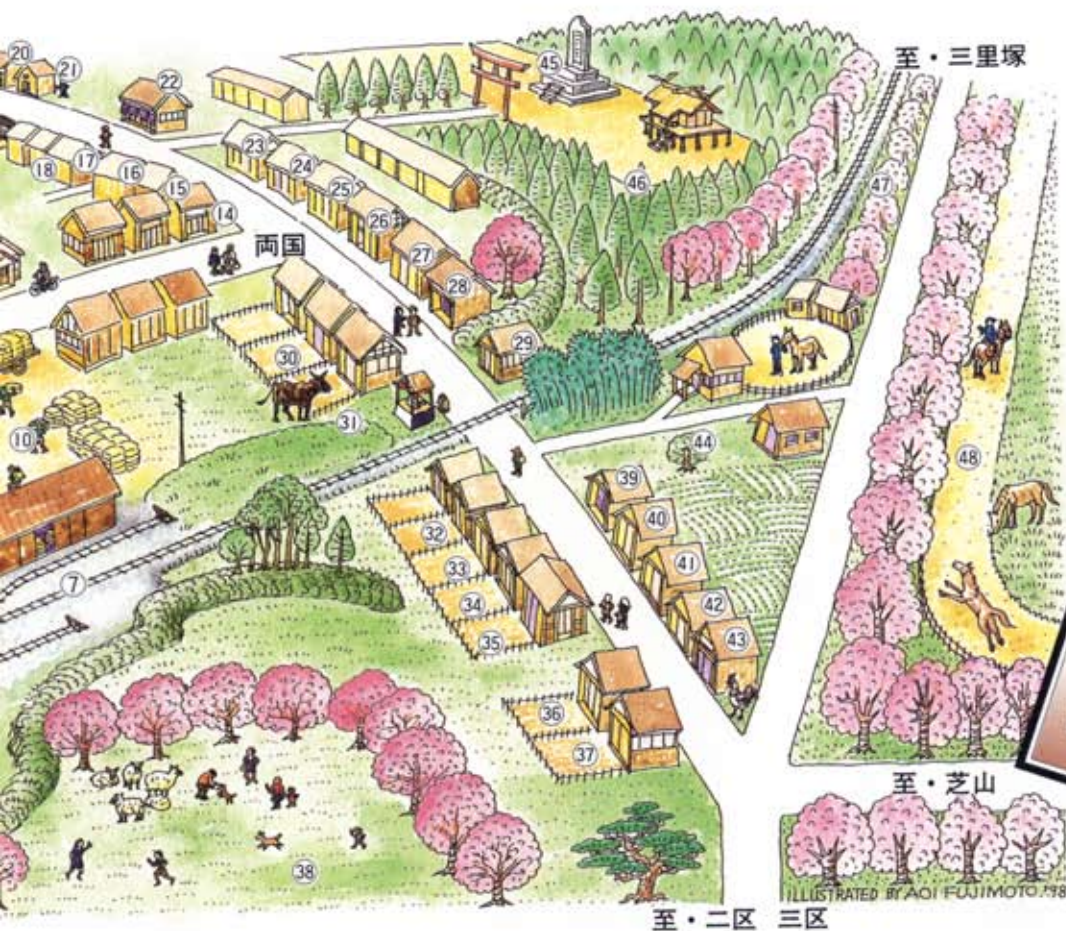
— 中野 よねさん —



軽便列車は、本当におもちゃのようでしたね。現在の動物愛護センターの前辺りから軽種馬協会の所まで、少し緩い坂になっているんだけど、そこを登るのにも一苦労で、乗客を降ろしては「おっべしてくれ」って機関士が言っていましたよ。雨の日にはレールに砂をまいて、滑り止めにもしていました。

駅には時刻表もあったけれど、時間通りに来たかなあ。駅で乗れなくてもどこでも飛び乗れたし、それに、遠くから「待ってくれ〜」って叫んでいるのも、なんとなくおかしかったね。

春は本当にいい季節だった。三里塚までずっと続く桜並木を通り抜けて、お花見に行ったもんだし。懐かしいねえ、花の列車も昔の兩國も・・・



西國四十八景

ILLUSTRATED BY AOI FUJIMOTO '98



軽便鉄道
特集 幻のポツポ

①富里駅：待合室や駅長室、官舎やふろ、公衆便所がある ②転車台 ③駅裏倉庫と荷馬車群 ④玉森種徳店 ⑤吉田材木屋 ⑥石田屋雑貨店 ⑦内田家倉庫前の引き込み線：私設による側線 ⑧駄菓子屋 ⑨種徳店 ⑩内田家集荷場：主に種徳や穀物を集荷し貨物列車で八街や三里塚に輸送した ⑪新酒屋 ⑫長野仕立て屋 ⑬二宮医院 ⑭小川飲食店 ⑮多田豆腐屋 ⑯二十番 ⑰宇井時計店 ⑱内田さん ⑲内田勝一郎さん：当時かわらぶきの屋根は駅とここだけであったらしく、味噌や醤油工場などもあった ⑳江原菓子店 ㉑駐在所 ㉒美家古屋 ㉓鈴木さん ㉔山田さん ㉕鈴木さん ㉖段木さん ㉗中野さん ㉘大桜屋 ㉙平野煎餅屋 ㉚鈴木さん ㉛小林酒店：牛で遠方まで仕入れに行った ㉜伊藤床屋 ㉝白井足袋屋 ㉞多田さん ㉟吾妻屋 ㊱小川そば屋 ㊲河西さん ㊳御料牧場：ここにつながる土手などで子供たちが遊んでいた ㊴若林さん ㊵糸川さん ㊶佐野さん ㊷新井さん ㊸通称鳥屋：鶏などの肉や卵を売っていた ㊹日本軽種馬協会：広場の後ろには種付け場などがあった ㊺富里牧羊場跡 ㊻神武様：この境内で芝居などが上演されていた ㊼絶景桜並木：両国地区から三里塚まで延々と続いていた。軽便鉄道が「花の列車」の異名を取るように、まさに春は軽便列車の最高の季節であった ㊽馬場：春と秋の年2回この馬場で草競馬が行われていた。その時の盛況は近隣の町村から、大勢の人が軽便鉄道に乗るなどして両国に集まった

駅裏広場での初荷（写真：梅田くに氏所蔵）



毎年1月4日に行われ、検査に合格したビール麦や材木などを八街まで運んでいた。轡には日本加里工業株式会社と書かれている。奥は倉庫。右の家は玉森さん宅。



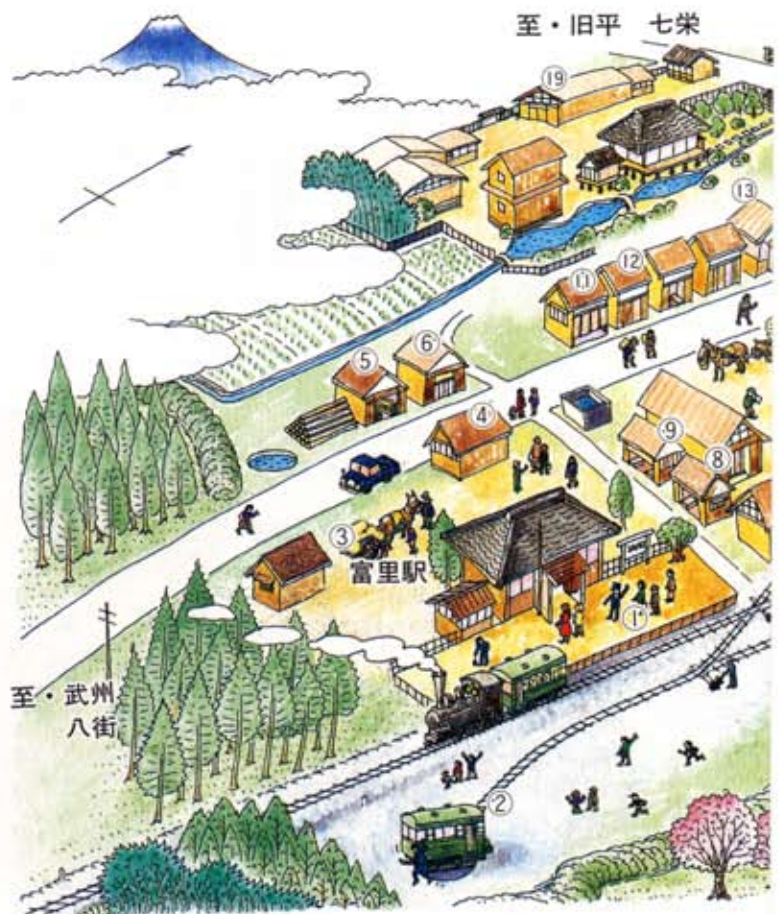
成田鉄道時代の富里駅長 斉藤利吉さん（写真：梅田くに氏所蔵）

それに、「三里塚駅〇時〇分に発車」と電話があるとポイントを切り換えたり。富里駅に汽車が到着すると、キャリアに入れたタブレット（単線鉄道の通行票・衝突事故を防ぐためのもの）を機関士に渡していました。休暇は決まっていなくて、何かあると三里塚駅から助役さんが来て交替していたわね。月給は20円くらいもらっていたのでしょか。

私の父は、昭和14年に八街支線が廃止になるまで、富里駅の駅長として勤めていました。駅長一人だけの駅だったから、切符の販売や売上げ日報の作成、貨物車の荷物取扱いなどの伝票も作成していたようです。駅の中は待合室と駅長室、官舎になっていました。駅の別棟にはおふろもあって、それを機関車の燃料で沸かすものだから「駅のおふろは熱い」って、よく言われたものです。ご近所さんが、たまにおふろに入りに来たんですね。人なつこい時代だったんですね。

人なつこい時代だったんですね

—梅田 くにさん—



至・旧平 七栄

至・武州 八街



うちは、その当時、親父が酒屋をやっていたんだけど、御料牧場で働く人が結構飲みに来たもんだよ。鉄道のおかげで、近隣の村からもよく人が集まって来たしね。軽便が廃止になって、学生や運送業の人は困ったろうね。また牛車や馬車に逆戻りだもん。足になるバスが通るのは、結構あとだったからね。

列車の方が横転さ・・・

軽便の思い出というのと、やっぱり事故のことかな。私の家の前辺りで、八街の大寺屋商店という卸問屋のトラックとぶつかっただ。そうしたら、列車の方が横転さ。線路の幅が極端に狭いから、不安定な構造だったんだろうね。近所の人たちで列車を起こしていたな。でも、そんな事故は知っている限りでは、その一回くらい。



小林 朝造さん



内田 静江さん

でも、歩いて行った時代だから、そんなに軽便を利用する人もいなかったのですが、あれがなければ、不便でしたでしょうね。それに、近所の男の子たちが、列車からこぼれる石炭を探したりして、家のおふろを沸かす燃料として拾っていましたね。今では本当に懐かしい思い出です。

映画やサーカスを見に

八街からお花見列車がやって来ると、富里駅で歌ったり踊ったりして、乗客も地元の人もそれは楽しそうでしたよ。

八街には八雲館という映画館があったり、芝田サーカスというのも来ていたりして、それを見に行くのも、とても楽しかったです。私も女学生時代は、あの列車に乗って佐倉まで通っていましたよ。昔はかなり遠い所

機関士は人気があったな

実際の口に駅があったところは、診療所や歯科医院もありました。線路が通るということで、まっすぐの道をわざわざ回り道に作り直してね。だから線路を避けるように道が曲がっていたんですよ。当時の実際の口も運送業が盛んだったですね。今の方がむしろ廃れてしまったかな。子供の数も結構いました。鉄道が開通した当初は、機関車だけ走っていたのですが、後にガソリンで走る気動車も登場しました。枕木は鉄製で造りも簡単なものでしたね。

それに、機関士は女の子に人気があったな。南小学校の前を通ると、みんなが列車に手を振っていたりして。だから、男子の中には、将来機関士になりたがる人も結構いましたよ。



松戸 豊さん

時刻表を見ると、八街—三里塚間を43分で運行していたことが分かる。開通当初は60分かっていた。

また、宅扱貨物運賃とあるが、普通運賃と特別運賃があり、主に米、野菜、炭、味噌など生活必需品の輸送は、特別運賃として若干割安の料金設定となっていた。

ちなみに、旅客運賃は支線開通当初の大正4年ころで、八街—三里塚間は38銭。八街—富里間で12銭であったものが、昭和10年には、八街—三里塚間が30銭、八街—富里間で18銭であった。

(史料：稲野辺 実氏所蔵)

汽車時刻表
昭和十一年十二月十五日改正
成田鐵道株式會社
本社 成田 電話 二二〇〇

下り列車

区間	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
八街	6:00	6:30	7:00	7:30	8:00	8:30	9:00	9:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00	12:30	13:00	13:30	14:00	14:30	15:00	15:30
三里塚	6:15	6:45	7:15	7:45	8:15	8:45	9:15	9:45	10:15	10:45	11:15	11:45	12:15	12:45	13:15	13:45	14:15	14:45	15:15	15:45
富里	6:30	7:00	7:30	8:00	8:30	9:00	9:30	10:00	10:30	11:00	11:30	12:00	12:30	13:00	13:30	14:00	14:30	15:00	15:30	16:00



やはり鉄道はいいね、街に活気が出るから。富里にまた鉄道が出るのは、いつのことになるのだろう。街づくりはチャンス逃すと50年も100年も挽回出来なくなるのかねえ。

よね。
駅名は正しくは「富里駅」なんだよね。

「東京の両国ですか」って

特に冬場は、機関車
が通ったあとは、石炭
殻で辺りの枯れ草が燃
えるんだ。「野火」と言
って、学校帰りに線路
工夫が消すのをよく手
伝ってね。そのうち面
白くなって、消すんじ
やなくて火を付けたり
して、「このやろうー」
なんて叱られたりして
仲間と遊んでたよ。



高橋 照治さん

それに、たまに遠く
の駅に行つて、帰りの
切符を買う時に「両国

もう花見には行かせないよ

実の口駅前で両親が
運送業をしているとき
は、麦、スイカ、豆や
里いもなどを農家の人
から購入して、それを
八街経由で東京まで送
っていました。

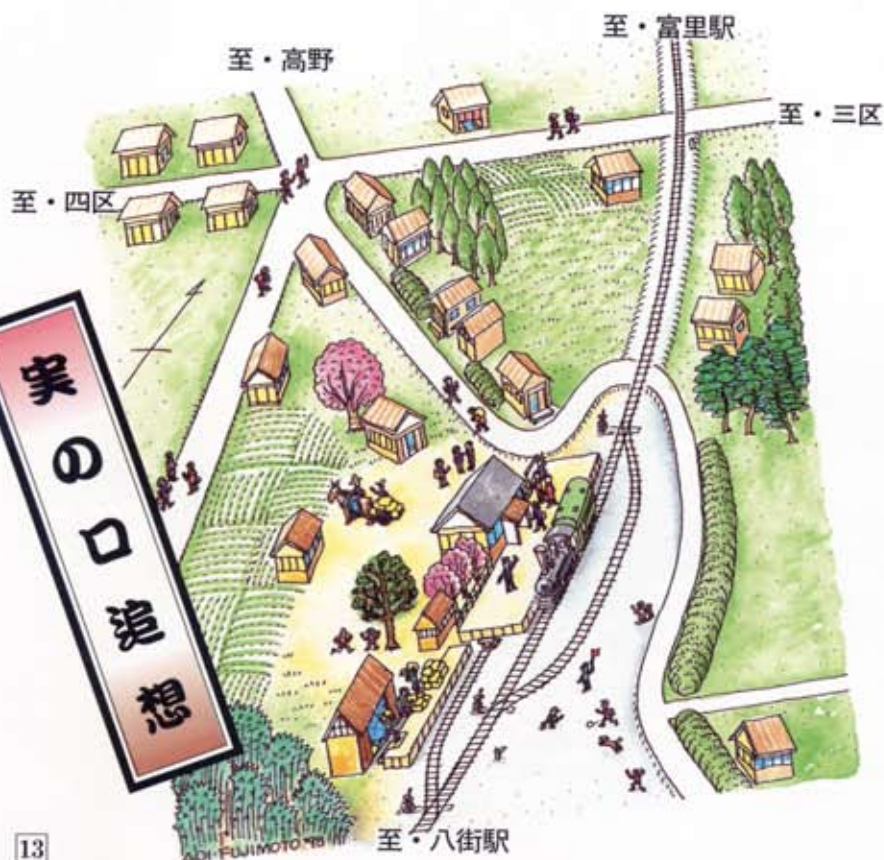
開通当初は、実の口
には守屋さんという駅
長がいましたね。路線
廃止ころでは、正規の
駅員さんというより、
近所の人が駅長代わり
をしていたようです。

私も花見の季節は、
三里塚まで行きましたよ。でも家
に帰る時間が5時を過ぎると「も
う、花見には行かせないよ」って
母から怒られたものです。

実の口駅から富里駅までは、ほ
とんど真つすぐに線路が続いてい
て、子供たちが汽車と追いかけて
こもしていましたね。
路線廃止後は、その復活の話も、
一部ではあったようですよ。



塩野谷久子さん



軽便鉄道が走っていた当時は、両
国同様に実の口でも運送業が栄えて
いた。収穫期には、周辺の地域から
多くの穀物などが集められ、一括し
て大都市に輸送されており、まさに
軽便といえども鉄道の持つ底力と言
えよう。更に記録では、成田鉄道運
送組合を通じて列車の臨時便も運行
し、陸運の便宜も図っていた。

また、駅前の通り沿いには歯科医
院や診療所、駄菓子屋もあり、当時
は今以上にぎわいを見せていたと
地域の人々は語る。